

序

「南部はアメリカとは異質と思われがちだが、実はこの国の本質なのである。異質に見えるのは、アメリカ人の悪いところばかりが凝縮されているからである。」

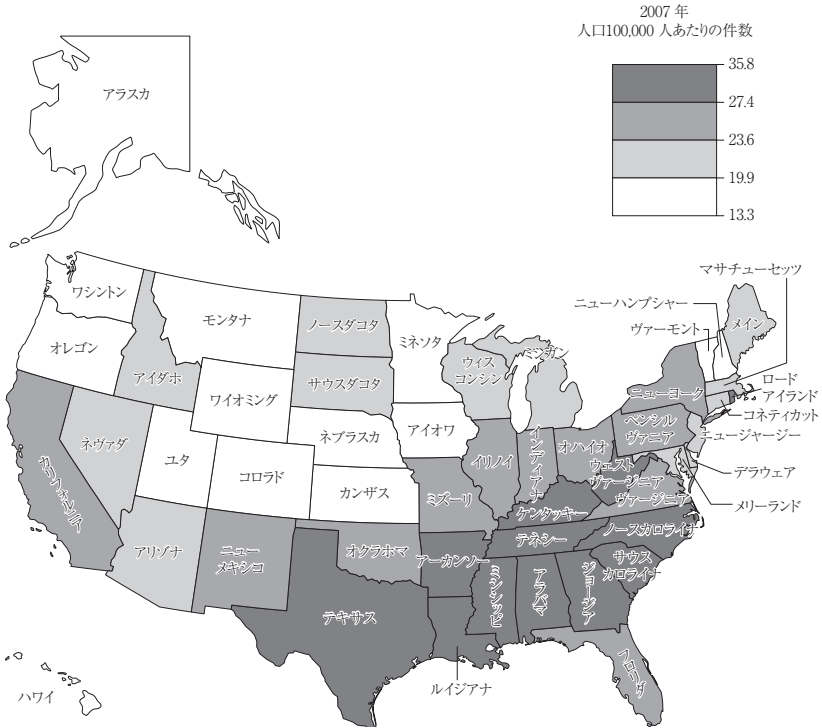
——ハワード・ジン『神秘的南部』(*The Southern Mystique*, 1964年)

「アメリカ南部」と聞いて何を思い浮かべるだろうか。広大なプランテーションに壮麗な屋敷といった映画『風と共に去りぬ』(*Gone with the Wind*)のイメージ。あるいは、『ミシシッピ・バーニング』(*Mississippi Burning*)の公民権運動家を殺害するクー・クラックス・クランのイメージかもしれない。アメリカ人にとっても南部のイメージはあまり良くない。奴隷制度を擁護していた、連邦を離脱し南北戦争を引き起こした、連邦復帰後も人種隔離政策をとるなど偏見が強い、教育レベルが低い、いまだ貧困層が多い、殺人など暴力が蔓延っている、などである。こういったイメージは数字にも裏づけられ(たとえば州別の殺人件数を比べると南部が圧倒的に多い。次頁の図を参照)、アメリカの理想像からはほど遠い。

この「南部」がどこを指すのか明らかにすべきだろう。一番わかりやすい定義は、南北戦争時に連邦から離脱し南部連合国を結成した11州である。ヴァージニア、ノースカロライナ、サウスカロライナ、ジョージア、フロリダ、アラバマ、ミシシッピ、ルイジアナ、テキサス、テネシー、アーカンソー、ということになる。しかし、奴隷制度を認めていたといえ、ミズーリ州やケンタッキー州、メリーランド州、デラウェア州もそうであった。さらに付け足しておくと、南部連合国はウェストヴァージニアがヴァージニアから離脱するのを認めていなかったし、オクラホマ準州のチェロキー族は南部連合国と協定を結んでいた。

もう一つ、メイソン・ディクソン・ライン(Mason-Dixon Line)以南を「南部」とする分け方がある。ペンシルヴァニア州とメリーランド州の州境から南が南部となり、南北戦争以前は、この線の北側は自由州、南側が奴隷州と

州別殺人件数



なっていた。現在の国勢調査の「南部」の定義はこれに基づいている。iii 頁の図にあるように、ウェストヴァージニア、メリーランド、デラウェア、ワシントン特別区、オクラホマといった南部連合国に加入していない州も多く入っている。もっとも、1860 年時点のすべての奴隷州を含んでいるかというそうではなく、ミズーリが入っていない。

これらの定義は州を基準に線引きをしているが、州境を基にした区分を疑問視する意見もある。社会学者ジョン・シェルトン・リード (John Shelton Reed) は、南部人が定義する南部、つまり住民の南部人意識からの定義を試みた。電話帳で会社や組織の名前を調べ、「アメリカン」よりも「サザン」といった名前が多くみられるところをデータ化した。その結果、ノースカロライナ、サウスカロライナ、テネシー、ジョージア、アラバマ、ミシシッピ、ルイジアナは南部人意識の強いところとなり、ヴァージニア、ケンタッキー、

「南部」を定義する場合、地理的な部分だけでなく、文化的な要素も加味して考えるべきかもしれない。まず、南部人は信仰心が篤いとされている。実際、プロテスタントとメソジストのプロテスタントが多く、また保守的なクリスチャンが多い。銃所持賛成、死刑賛成、中絶反対、といった立場が顕著であることから保守的で、伝統を重んじ、家族の絆を大事にする傾向がある、とも言われる。多くの南部研究者は、南北戦争で負けたことが南部人に精神的ダメージとアイデンティティを与えたと指摘する。W・J・キャッシュ（Wilbur Joseph Cash）は1941年に出版した『南部の精神』（*The Mind of the South*）のなかで、南部の特異性についてこう述べている。「一般に南部はまったく異質な土地だと信じられている。北部においても南部においてもそうだ。アメリカのほかの地域と明確な違いがあり、しかも南部内部は驚くほど均質であると思われる」。実際、南部の特徴についてはさまざまな意見があるものの——とくに北部人と南部人では考えが食い違っていることが多い——、南部が他地域とは異質である、という考えは共通しているようである。

以上を総合すると、「南部」とは南部連合国に加盟した、あるいは奴隷制度を擁護していた地域であり、南北戦争の体験から南部人としての意識を強く持つようになり、現在でも他地域とははっきりと区別され、とくに宗教と政治において保守的傾向が強いところとなろう。

南部はアメリカにとって都合のよいスケープゴートになる。イラクのアブグレイブ刑務所における囚人虐待の実態が明らかになった2004年、説明を求められた当時のジョージ・W・ブッシュ大統領は、虐待写真に「嫌悪を催す」、虐待は「私の知っているアメリカを反映していない」と述べた。虐待の担い手としてマスコミに大々的に報じられ、軍法会議では実刑判決を受けた女性兵士リンディ・イングランド (Lynndie England) は、南部の田舎出身、いわゆる「ヒルビリー」である。アメリカ社会はしばしば、犯した過ちや否定的なイメージを南部の教養もなく貧しい白人に押しつけようとし、この時もまさにそうだった。過去の人種差別にしても現在の移民に対する反発にしても、「理不尽で思いやりがないことをするのは南部」と説明されがちである。南部の好ましくないイメージ（敗北、貧困、暴力など）は、アメリカの「他者」の役割を果たしてきた。

ところが、アメリカの歴代の大統領を見れば南部人が多い。合衆国成立当初はもとより、20世紀後半を見ても、リンドン・ジョンソン、ジミー・カーター、ビル・クリントン、ジョージ・W・ブッシュが南部出身者である。アメリカの恥部を象徴するようで実はアメリカの中枢でもある「南部」を歴史的に考察すれば、見えざるアメリカの姿が見えてくるのではないか。南部の特徴を語るときにしばしば指摘されるのが、その相反する性質である。南部人は、愛国心が強く信仰心も篤い模範的なアメリカ人とも言えるし、州権にこだわり個人を強調する反体制的なアメリカ人とも言える。しかし、もともとアメリカ自体が矛盾を孕んでおり、南部中心にアメリカの歴史を振り返ることによって、アメリカの本質を探れるのではないか。本書の目的はそこにある。

南部の歴史を辿りながらアメリカを違う角度から見ていく。建国以来、いまだ衰えていない南部の存在感と影響力。この地域がアメリカという国家の形成と再生にいかに関与してきたか読み解いてみよう。

目 次

序 i

第1章	ジョン・スミスが描いた社会	1
	——ジェイムズタウン植民地とポカホンタス	
1	アメリカの理念	3
2	南部植民地と北部植民地の違い	3
3	キャプテン・ジョン・スミス（1580～1631年）	6
4	ポカホンタスの夢	13
5	南部のインディアン	21
	Column 1 「消えた植民地」ロアノーク島	23
第2章	ジョージ・ワシントンが象徴する新国家	25
	——農園主、将軍、大統領	
1	南部のプランター	27
2	奴隷制度に根ざした社会	27
3	アメリカの独立と「南部」の創出	32
4	ジョージ・ワシントン大統領（初代、1789～1797年）	36
5	「村落の破壊者」	46
	Column 2 大統領の大農園 マウント・ヴァーノン	48
第3章	トマス・ジェファソンの描く国家	51
	——独立宣言と農本主義	
1	アメリカの民主主義	53
2	ジェファソンとヴァージニア	54
3	奴隷制度の是非を問う	61
4	白人の国／混血の国	70
5	モンティチェロに込められたアメリカ	73
	Column 3 反乱奴隷の「告白」	77

第4章	アンドリュー・ジャクソンと南西部	79
	——西部開拓、インディアン・ファイター	
1	ジャクソニアン・デモクラシー	81
2	開拓の犠牲者	82
3	南部のフロンティア	87
4	アンドリュー・ジャクソン大統領（第7代、1829～1837年）	94
5	「西部」の大統領	102
	Column 4 黒人のインディアン	105
第5章	ジェファソン・デイヴィスの南部連合国	107
	——奴隷制度をめぐる戦い	
1	南北戦争（the War Between the States）	109
2	奴隷制度廃止運動	111
3	南北の均衡	117
4	長期化する戦争	122
5	戦争の終結	128
	Column 5 南軍旗が象徴するのは	131
第6章	アンドリュー・ジョンソンの南部再建	133
	——共和党急進派、白人復権	
1	南部再建の悲劇	135
2	南部再建をめぐる攻防	135
3	夜明け——黒人にとっての南部再建	143
4	南部再建の失敗	148
5	「革命」の終わり	153
	Column 6 クリオールの音楽	155
第7章	シオドア・ローズヴェルトとラフ・ライダーズ	157
	——領土拡大、白人支配	
1	米西戦争	159
2	「どん底」へ	164
3	20世紀の大統領——新しい国	171
4	共和党ローズヴェルトの変心	174
	Column 7 世紀転換期の人種暴動	179

第8章	ウッドロー・ウィルソンの書くアメリカ ——南部復権とマスメディア	181
1	出版業界の影響	183
2	南部の変遷	185
3	黒人イメージの悪化	189
4	南部（白人）イメージ改善	192
5	南部の復権	195
6	ウッドロー・ウィルソン大統領（第28代、1913～1921年）	199
	Column 8 『國民の創生』	204
第9章	フランクリン・デラノ・ローズヴェルトと黒人社会 ——「どん底」から闘争へ	207
1	「約束の地」	209
2	北部大移住	210
3	南部黒人の抵抗	215
4	南部から北部へ	222
5	フランクリン・D・ローズヴェルト大統領（第32代、1933～1945年）	227
	Column 9 南部のユダヤ人	232
第10章	ドワイト・D・アイゼンハワーと公民権運動 ——最高裁判決、大統領の介入	235
1	ハリー・S・トルーマン大統領（第33代、1945～1953年）	237
2	法廷闘争から公民権運動へ	241
3	大統領の介入と南部知事の抵抗	248
4	公民権法成立に向けて	255
	Column 10 大衆のヒーロー ジョー・ルイス	263
第11章	ジミー・カーターに見る「南部」 ——農業の衰退と南部の変貌	265
1	南部の変貌	267
2	南部農業の変化	267
3	南部の工業化	274
4	ジミー・カーター大統領（第39代、1977～1981年）	278
5	南部の後戻り	282

第12章 ビル・クリントンの信仰心 291

——南部と宗教と政治

1 「神を味方に」 293

2 南部の信仰心 293

3 進化論教育反対 299

4 ビル・クリントン大統領（第 42 代、1993～2001 年） 305

5 21 世紀のアメリカと南部 312

Column 12 融合の音楽 エルヴィス・プレスリー 317

あとがき 319

参考文献 321

索引 326

JOHN SMITH

第1章

ジョン・スミスが描いた社会

ジェームズタウン植民地とポカホンタス

ピューリタンが北部マサチューセッツに人類の模範となる「丘の上の町」を建設し、その宗教的な役割を強調したのに対して、ロンドンの合資会社が南部ヴァージニアに築いた植民地ジェームズタウンは、利益を追求するいわばビジネスだった。国王から勅許状を得たヴァージニア会社が植民地で目指したのは、金、銀などを発掘することと、インドへと抜ける航路を見つけること、そしてそれらによって利益を得ることだった。そこには、神との契約に基づいた社会を築くというような高尚な意図はなく、会社の利潤だけが求められていた。

ジェームズタウン建設に多大な貢献をしたジョン・スミスは、下層階級出身の探検家で、勤勉、労働を重んじ、旧世界の階級制度を廃して誰もが出世できる社会を構想した。原住民のインディアンとも共存することを目指し、彼らの文化を学ぼうとした。しかし、スミスが本国に帰国した後の植民地は、インディアンとの戦いを選び、インディアンから奪った土地を耕し、タバコの栽培で繁栄したのである。

ジョン・スミス年表

- 1580 年 イングランド東部リンカンシアの農家に生まれる
- 1597 年 ヨーロッパに渡り兵士となる（オランダ兵とともにスペインと戦う）、戦争が終わり 1599 年には帰国している
- 1600 年 オスマン帝国と戦うため傭兵として神聖ローマ帝国に渡る、1605 年に帰国する
- 1606 年 ジェイムズ I 世がヴァージニア会社に勅許状を出し、12 月にクリストファー・ニューポート率いる 3 隻がジェイムズタウンに向かう（ジョン・スミスも乗船）
- 1607 年 ジェイムズタウンに到着した植民者らはすぐに砦を建設、川の上流を探検していたスミスは捕えられ、処刑される寸前にポカホンタスに救出される
- 1608 年～1609 年 植民地評議会の議長を務める
- 1609 年 負傷したためイングランドに帰国する
- 1609 年 あらたに国王の許可を得て 500 人の植民者を乗せた 9 隻がジェイムズタウンに、1610 年にかけての冬に植民地人口は 60 人に激減
- 1612 年 ジョン・ロルフがタバコの栽培に挑戦する
- 1613 年 ポカホンタスが捕えられ、人質としてジェイムズタウンに連れて来られる
- 1612 年 『ヴァージニアの地図』を出版する
- 1614 年 ロンドンの商人の出資でニュー・イングランドを探検する
- 1616 年 『ニュー・イングランド概要』を出版する
- 1616 年 ポカホンタスが夫ジョン・ロルフとともにイングランドを訪れる
- 1618 年 ポカホンタスがイングランドで死亡し埋葬される
- 1618 年～1623 年 多くの植民者がジェイムズタウンに赴き、人口は 400 人から 4,500 人に増えるが、多くが飢餓や病気、インディアンへの襲撃によって命を落とす
- 1619 年 ヴァージニアで初の代議員議会が開催
- 1619 年 寄港したオランダ船から 20 人ほどのアフリカ人が降ろされ食糧と交換される
- 1620 年 『ニュー・イングランドの試練』を出版する
- 1620 年 メイフラワー号がイングランドからプリマスに向かって出発
- 1622 年 パウアタン族による植民地襲撃により 300 人を超える植民地が犠牲となる、この襲撃により植民地側もインディアンの村落を襲撃するようになる
- 1624 年 『ヴァージニア、ニュー・イングランド、およびサマー諸島全史』を出版する
- 1623 年 国王ジェイムズ I 世がヴァージニア会社に対する勅許状を取り消し、翌年会社は解体
- 1625 年 チャールズ I 世即位
- 1631 年 ジョン・スミスがイングランドで死亡
- 1634 年 チャールズ I 世がメリーランド植民地創設を許可、カトリック教徒が安全に暮らせる場所となる

1 アメリカの理念

自らジェイムズタウン (Jamestown) に赴いた投資家は多くない。インディアンの襲撃、飢餓、病気などによって、最初に移住した 105 人のうちほとんどが数ヶ月で命を落としたことを考えれば、行かない者にとっては幸いだったと言えよう。それでも、初期植民者のうちほぼ半数が上流階級の「ジェントルマン」だった。植民地のリーダーとして送り込まれたジェントルマンは、自ら汗水流して働こうとはしないうえ、お互いを陥れることばかりを考え、周りで多くが病と飢えのために死んでいっても何もしないという有様だった。こういった状況でジェイムズタウンが崩壊せずに今日のアメリカ合衆国の基礎を築くことができたのは、17 世紀のヴァージニア植民地に、イギリス上流階級とはまったく違った思想が取り入れられたからだ。

その思想の背景には、2 人の人間にルーツを求めることができる。下層階級出身の探検家ジョン・スミス (John Smith, 1580～1631 年) とアルゴンキン族 (Algonquians) 連合をまとめる族長パウアタン (Powhatan) の娘ポカホントス (Pocahontas, 1595?～1617 年) である。スミスは勤勉、労働を重んじることで、厳格な階級制度を廃し誰もが出世できる社会を構想した。ポカホントスは白人植民者の窮地を何度も救い、インディアン原住民と白人植民者が共存できる社会を求めた。この 2 つの思想が結びついた「生まれに関わりなく誰もが出世できる多様な社会」こそが、アメリカ合衆国の理念であり、21 世紀に入った現在でも追い求められている姿なのである。

2 南部植民地と北部植民地の違い

夢の (非現実的) 世界

ジェイムズタウンが建設されたチェサピーク湾 (Chesapeake Bay) は、北米最大の入り江である。それは現ヴァージニア州南部からメリーランド州北部まで 200 マイル、海岸線でみれば実に 8,100 マイルにも及ぶ。ジェイムズ川

の河口に位置するジェームズタウンを「人が住むのに最適の場所」とジョン・スミスが表現したのは、この一帯の豊富な産物と肥沃な土地を指してのことだった。チェサピーク湾ではハマグリ、カニ、ウナギ、カレイ、サケ、マスなど豊富な魚介類を獲ることができ、冬になればガン、カモなどの水鳥が渡ってくる。後に主産物となるタバコの栽培に適していたのは、立地だけでなく交通の便も良かったからだった。海岸線が長く、船の通りやすい川がいくつもあり、タバコを運ぶには最適だったのである。ジェームズタウン建設から1世紀を経たときには、チェサピーク地帯からの輸出品の4分の3をタバコが占めていた。

このような場所を植民地建設考案者らが「楽園」と宣伝したとしても不思議ではなかろう。もともと、大航海の時代には、コロンブスなど航海家が、新大陸を美しい自然が広がり、金や銀などが豊富にあり、行きさえすれば金持ちになれるところとして——エデンの園のように——描いていた。ジェームズタウン構想はそのようなイメージを踏襲している。これは、ピューリタンが植民したプリマス、マサチューセッツ・ベイなど北部植民地のイメージとはずいぶん違う。17世紀のピューリタンは、自分たちの思想に基づいた社会を創り出そうと新大陸に渡った。安定を求め家族単位での入植だった。植民地の指導者ウィリアム・ブラッドフォード（William Bradford）が残した日記『プリマス・プランテーション』（*Of Plymouth Plantation*）では、入植者が「神の民」と呼ばれコミュニティの重要性が強調されている。ヴァージニア入植者にはこのような結束は見られず、多くが歳若い男性の年季奉公人だった。「神の国を創る」といったようなコミュニティとしての目的があるわけではなく、それぞれが個人の富を築くことを目指していた。ピューリタンらが神との新たな契約に基づいた「理想の楽園」を夢見たのに対して、ヴァージニア入植者はまさに「現実の楽園」で豊かな生活を送ることを求めたのだった。

南部／「アメリカ」社会

ヴァージニア植民地はほかのヨーロッパ諸国が持つ植民地とは区別される。その大きな違いの背景には、イギリスが植民事業に出遅れたことが挙げられる。すでにポルトガルは、アフリカだけでなく、現在のブラジル、インド、

インドネシアの地域に植民地を持ち、果ては中国でもマカオを港として使っていた。スペインも、南米、中米、フロリダ、キューバ、そしてフィリピンをほとんどを制覇していたのである。イギリスは、この植民事業の遅れを、ほかの欧州列強との違いを示すことで克服しようとした。つまり、ポルトガル、スペインの残虐行為を槍玉にあげたのである。たとえば、メキシコのアズテック族 (Aztecs) を征服したヘルナンド・コルテス (Hernando Cortés) は、部族の皇帝を誘拐し、その財宝を奪い取り、貴族を虐殺し、都市を破壊した。ペルーのインカ族 (Incas) を征服したフランシスコ・ピサロ (Francisco Pizarro) も同様の非道ぶりで、死亡したばかりの皇帝の息子を人質に大量の金と銀を要求した。そして、捕まえた人々を植民してきた人たちに奴隷として与えたのだった。イギリスは、このような残虐行為をわれわれはしない、スペイン人は略奪により富を得るがイギリス人は自ら働いて得るのだと公言した。ヴァージニア会社のパンフレットには、彼らはインディアンを武力や殺戮で征服するのではなく、イギリス人の気質にあった公正で愛のこもったやり方でインディアンの信頼を得るとあった。植民することに関しても、「土地が豊富にあるのだから、そのうちわずかばかりのところに住んでもかまわない。それに、原住民をキリスト教に改宗させるには日頃の関わりと対話が必要なのだ」と説明した。

こういった文言を読めば、アメリカ合衆国の始まりが輝かしく立派に見えてくるだろう。理想的なアメリカ——その社会の原型をジェームズタウンに見出す人は少なくない。とくに、1619年に創設され、ある程度の自治を任された代議院を現代の民主制の始まりだと評価する見方は一般的である。確かにヴァージニア会社は、植民地（のちには合衆国）発展に不可欠となる、人頭権と、代議員による議会を導入した。前者では一定の条件を満たした入植者（渡航費を個人で負担した、あるいは他人の渡航費を負担した）に土地を約束し、後者では植民者の自治を謳った。投票で選ばれた議員が議会を形成し、土地を所有している男性に投票権が与えられた。しかし、投票で選ばれた議員のほかに、会社が選んだ議員がいただけでなく、会社の選ぶ総督には拒否権もあったため、この制度導入が必ずしも民主的とは言えない。実際は、ロンドンの会社に承認されなければ何も決まらなかったのである。

そして同年、ジェームズタウンで奴隷の売買が行われたという記録が残っ

ていることから、この 1619 年は、輝かしい「民主制」が産声をあげた年であると同時に、アメリカの負の歴史の始まりの年でもあることは強調されるべきだろう。土地の個人所有と代議制議会導入とはアメリカ建国の基礎となるが、その数週間後に最初の奴隷が運ばれてきた。オランダ船ホワイト・ライオン号にはポルトガル船から奪った 20 人ほどのアフリカ人が積まれていた。ジョージ・ヤードリー (George Yardley) 総督は船に帰りのための食糧を与えるかわりに、これらのアフリカ人を受け取った。これはまさに「売買」であると言えよう。アフリカ人はすぐに白人の年季奉公人らとともにタバコ畑で働かされた。もちろん、当時は年季奉公人として多くの白人労働者が渡ってきていたし、黒人も彼ら同様、一定の期間が過ぎれば自由になれるはずだった。またアフリカからの「輸入」を基盤とした奴隷制度がすぐに定着したわけでもなかった。とりあえずは、奴隷を購入するよりも、会社が大抵は無償で供給してくれる白人の年季奉公人を利用する方が安くついた。

奴隷労働が定着していくには農地拡大を待たねばならなかったが、その芽は 1619 年にすでにあつたと言える。当時、国王はタバコの栽培に反対しており、総督もタバコ以外の栽培を奨励した。しかし、タバコが利益を生むことから植民地人はこぞってこれを栽培したのである。移住を推進するために、ヴァージニア会社は移住者に土地を約束した。そして同時期に始まった植民地における私有地化が、このようなタバコ栽培に拍車をかけたのである。農地が拡大されていくにつれて、永久的に無償労働が保証される奴隷所有に土地所有者が傾倒していったのは当然の成り行きかもしれない。

3 キャプテン・ジョン・スミス (1580～1631 年)

傭兵、冒険家

スミスは 1580 年に農家に生まれた。階級的には小作農より一つ上というぐらいで、社会的身分は低い。地元の小学校に通ったあと 13 歳で船乗りになろうと家出を試みる。しかし、父親に止められ、15 歳で商人に奉公に出された。父親が死亡するとすぐに、スミスは国外に機会を求める。まず、オ

ランダがスペインから独立を得るための戦争に参加した。その後イングランドに戻るものの、軍隊の生活が気に入らず、軍事に関して独学で勉強した。そして、1601年にはハンガリーでオーストリア軍に参加する。中欧、北アフリカ、中東で勢力を広めていたオスマン帝国の軍隊と戦うためだった。その活躍を認められ、大尉（Captain）の肩書きをもらい、実力主義の味をしめることになる。



ジョン・スミス

Library of Congress Prints and Photographs
Division [LC-USZ62-55182]

彼はまた苦い経験もする。1602年に現在のルーマニアにあたる戦地で捕らえられ、奴隷として売り飛ばされた。トルコ人の農場に連行され、髪を剃られ首には鉄の輪をはめられた。しかし、そこで彼は主人を殺害して逃亡に成功したのだった。異国でのさまざまな経験を通して、生きのびる術を学んだスミス。実際、彼の著書に顕著なのは武勇伝の多さである。武芸競技大会でトルコ人の勇者を殺したとか、インディアンとの戦いを生き残った、など自らの強さを誇る記述が目につく。もちろん、これらで明確にしたかったのは、傭兵あるいは冒険家として自分がいかに優れているかということだった。これはスミスによるいわば「自己PR」であると言えよう。新大陸にはインディアンがいる、だから植民事業は大変だ、と感じている人たちに、スミスを使えばうまくことが運ぶと思わせようとしたのだった。

スミスがヴァージニア行きの切符を手にしたのは、ヨーロッパでの活躍から数年後の1607年のことだった。スペインあるいは原住民に攻撃されたときに傭兵として彼が役に立つだろうと会社は考えたのであろう。実際、ジェイムズタウンでスミスは資源や航路を見つけるために内陸を探検し、地図をつくり、敵対的なインディアンたちから食糧を確保するなど、期待以上の働きをしている。相手を知らないことほど危険なものはないと身をもって学んでいたスミスは、当時のほかのイギリス人と違い、インディアンのことをよく知ろうとした。パウアタン部族の言語や文化を学び、その知識を植民地のために役立てたのである。そして、取引と脅しを巧みに使い分けながら、人

数では圧倒的に負けていたインディアンとうまく渡り合っていた。

インディアンとの共存

周囲を上流階級出身者ばかりに囲まれ、ジェームズタウンでのスミスの立場は微妙なものだった。さっそく渡航中からエリートのエドワード・ウィングフィールド（Edward Wingfield）と対立する。貧しく教育もろくに受けていないスミスが、航海に慣れていることを強みに、あれこれ提案するのが快く思われなかったのである。そして、反乱を起こそうとしたと告発された彼は、途中から監禁されたままの航海を余儀なくされてしまう。しかし、ヴァージニア会社が到着後 24 時間以内に開封するよう指示していた封書が開封されると、植民地の評議会の委員 7 名のなかにスミスが含まれていることが明らかになる。下層階級のスミスが選ばれたことにケンブリッジや法学院の出身者は猛烈に反発した。評議会は結局、監禁は解くものの、相応しくないとしてスミスを議員として認めないことを決定した。つまり、植民地でも階級がものをいったのである。

しかし、この植民地を危機から救ったのはスミスにほかならない。初期の植民地には主に 3 つの問題点——労働意欲の低さ、状況判断の甘さ、実現不能の目的——があり、スミスがそれらをうまく解決した。まず、労働意欲のなさは深刻な問題だった。本国へ戻る船が出港した後も植民者はまったく働こうとしなかった。船がふたたび物資を積んで戻ってくるのを、これが半年も先であるにもかかわらず、待っているだけだった。植民者の半分は上流階級出身で、働くことに慣れていないことが原因ではあったが、多くがまだテント暮らしだったことを考えれば、手を動かすべきであったことは明らかである。夏になると事態は悪化する。すぐ近くにインディアンがいないという安全性と、川の深さが大きな船を駐留しておくのに適していたという利便性だけで選んだ場所は、湿地であったため蚊に悩まされた。また、誰も井戸を掘ることも湧き水を探しに行くこともせず川の水に頼っていたが、夏になると河口の水は塩分が多く含まれるようになり、植民地では病気が広がり、死亡者も多数出た。

こういった状況を打開するためにスミスは、植民地人に対して労働の大切さを説いた。後に議長に選ばれたスミスの方針は「働かざるもの食うべから

ず」で、短期間でその効果は現れた。家が建ち、井戸が掘られ、農地が耕された。作物の育て方は捕えたインディアンに教わる。収穫した食糧を貯蔵することも忘れない。彼らはインディアンの襲撃に備えて警備を置き、砦の建設にとりかかった。すべての植民地人が銃の取り扱いを学び、警備のローテーションを組んだ。全員が協力して働く体制を築いていったのである。

植民地人はまた、土地ばかりでなくインディアンについても無知だったため、何度も苦境に追い込まれることとなった。そしてこれもまた、スミスの知恵が救うことになる。異国でさまざまな経験を積んできたスミスは、インディアンと取引をし、彼らからいろいろと学ぶべきだと考えた。インディアンが、自分たちで食糧も準備できないイギリス人を馬鹿にしていると見てとったスミスは、小さな贈り物をたくさんすることによって、植民地には食糧と交換する価値のあるものがあることを示した。これにより、トウモロコシだけでなく、魚やカキ、鹿肉なども得ることができたのである。一つの部族に頼らず、いくつかの部族から食糧を得るようにした。インディアンとの関わりを重ねるうちに、スミスはアルゴンキン語を覚え、インディアンの生活を仔細に観察し、彼らの文化を学んだ。

たとえば、貯蔵していたトウモロコシがネズミにやられてしまったことを知ると、食糧が少なくなったときにインディアンがとった方法を試みた。植民地人を小さなグループに分け、川下のカキのあるところ、河口の魚が豊富なところ、などに拡散して住まわせるのである。敵対的なインディアンからはできるだけ遠いところに行かせたばかりでなく、銅と引き換えに何人かを友好的なインディアン部族内に住まわせてもらう。この方針はうまくいき、人々を餓死から救った。ここでも、インディアンの文化を取り入れたことが功を奏したのである。こういった柔軟な姿勢こそが、植民地には必要だった。

もちろんインディアンに弱みを見せるようなことはしない。あくまで強気の対応がスミスのやり方だった。パウアタン族は武器や道具を狙って盗みに入るなど、植民地をしばしば襲撃した。スミスはインディアンを何人か捕えると、解放を求めてきた族長のパウアタンに対して、盗んでいったシャベルや刀、道具などを全部返却することを要求した。パウアタンは逆にイギリス人2人を捕まえるが、スミスはインディアンを襲撃することを提案した。インディアンには好かれるよりも恐れられる方がよいと考えたのである。イ

インディアンを村を焼き払い、彼らのカヌーを破壊した。犠牲者はなかったものの、これはインディアンにとって大きな打撃となった。そして翌日2人のイギリス人が戻ってきたのだ。決してインディアンにはへつらわず、取引相手ではあってもときどき力を誇示するために脅しをかけることも忘れない。戦略的なスミスは、植民地の近隣のインディアンがイギリス人を嫌っていることを理解していた。そして、本国に引き上げないかぎりは彼らに好きになってもらうことなど望めないこともわかっていた。多くの植民地人はインディアンの使っていない土地を占領しているだけだと思っている、インディアンにしてみれば彼らは明らかに望ましくない侵入者なのである。だからこそ力を誇示する必要があった。

ヴァージニア会社の掲げた目的は、現地の事情を鑑みない、無理なものばかりだった。植民地人は金銀を探すのに躍起になっていたが、インディアンとの交流からこれらが存在しないと確信したスミスはただちにこの方針に反対を唱える。利益を得る代替品として彼は木材を提案した。また本国の会社は金を見つける以外にも、太平洋への航路を見つけることと、ロアノーク植民地で行方不明となった人たちを見つけることも要求してきた。どちらも内地への探検を必要とするため、植民地が安定していない段階では実現は難しい。スミスは会社宛の手紙を本国に戻る船に託し、会社の方針を変える必要があること——まずは植民地の基盤作りが大事で、そのためには大工や鍛冶屋、石工などが必要であることを訴え、会社もこの要求を受け入れた。このようにスミスの適切な判断によってジェームズタウンは存続できたのである。

「アメリカン・ドリーム」

ジェームズタウンは旧社会の社会的階層制度にとらわれない流動的な社会という特徴もあわせもっていたが、これはスミスによるところが大きい。まさにアメリカン・ドリームの創始者と言える。植民提案者たちは、植民地を「勞せずして富を蓄えられるところ」、あるいは「増え続けるイングランド人口の捌け口」ぐらいにしか考えていない。アメリカでの体験が個人にどのような影響を与えるか、など考えもしなかったのである。それに対してスミスは、職業軍人としての体験から、人は血統ではなくその働きによって評価されるべきだと考えるようになっていた。そして、アメリカを新しい習慣や法

律や人間関係によって形成されるまったく新しい社会だと位置づけたのである。当時のピューリタンたちも、新しい宗教国家建設を目指してはいたが、旧社会の社会的階層制度までも崩そうとは思っていなかったのだから、努力と功績によって社会的な地位が決まる社会を創ろうというスミスの考えは画期的と言える。

スミスは生涯で著書を8冊残している。もっとも、「本」と呼べるものは1つだけで、残りのうち4つは50頁にも満たないパンフレットだった。最初に出版された『ヴァージニア植民地』(*A True Relation of Such Occurrences and Accidents of Note as Hath Hapned in Virginia Since the First Planting of that Colony*, 1608年)は、もともとスミスが出版を意図したものではない。植民地で必要とする物資を運んできた船がイギリス本国に戻る際、艦長のフランシス・ネルソン(Francis Nelson)にスミスは、パウアタンの支配下にあるインディアン部族の地図とともに植民地人の体験を綴ったものを渡した。ヴァージニア会社への報告書、あるいは友人への手紙、ともとれる。これがジョン・ヒーリー(John Healey)なる編集者の手に渡り出版されたのである。スミスはこのことを知らなかったため、編集や出版には一切関わっていない。編集者はとどころ削り、最後には「植民地人が健康状態もよく、生活に満足していて、反乱などもなく、互いに仲良く暮らしていて、今後もインディアンとの和平が続くことを望む」と結んであった。スミスの原稿にはなかったのにもかかわらず、彼のことばとして書き加えたのである。つまり、これも他の多くの植民地宣伝パンフレット同様、新大陸に赴きさえすれば安定した生活が手に入れると訴えたのだった。これは、勤勉に働けば富と地位を得ることができるというスミスの考えとは異なる。

スミスがほかの著作、『ヴァージニアの地図』(*A Map of Virginia*, 1612年)、『ニュー・イングランド概要』(*A Description of New England*, 1616年)、『ニュー・イングランドの試練』(*New England Trials*, 1620年)、『ヴァージニア、ニュー・イングランド、およびサマー諸島全史』(*The Generall Historie of Virginia, New-England, and the Summer Isles*, 1624年)など、で描いたのは現実的な植民地の姿だった。彼はそこで、植民地では誰もが身を粉にして働かなければ生きていけない、と実態を明らかにした。実際、かなりの数の植民者が飢えと寒さ、インディアンへの攻撃で命を落としていたのだから、ばら色の生活を描くわけに



ジョン・スミスのヴァージニア地図
A History of the American People 1 より

はいかない。もちろん、ある程度の美化はある。あくまでも植民地を宣伝する目的で書かれているため、誰もが植民を希望しなくなるようでは困るからだ。

スミスの描いた植民地は労働を重んじる現実的なものであったものの、特に中流、下層階級の男性には魅力的なところだった。植民地は本国とは異なる開放的かつ流動的な社会であり、生まれや教育に関係なく、勤勉でさえあれば、個人の幸福、自由、名声が得られる。怠けたり、人に頼ったりせず、努力して働くことによって富を得る——これはまさにアメリカン・ドリームなのである。スミスは教育、遺産、縁故がなくとも成功できる、と植民地の魅力を宣伝した。旧社会では、社会的地位を「自分の力で獲得する」ことなどありえなかった。

その一方こういった社会にスミス自身が戻れなかったのは皮肉なことである。1609年に事故で負傷したスミスは帰国を余儀なくされた。怪我から回復するものの、個人主義的で自立を重んじ、下層階級出身ながらも上流階級